

はしがき

国際文化交流学部は、2018年4月に誕生しました。1期生の皆さんはきっと、希望と不安を抱え、ご入学なさったことでしょう。この数年間は、コロナ禍に見舞われるなど、決して順風満帆というわけにはいきませんでした。その1期生も2022年3月に社会に巣立っていきました。就職率はなんと100%です。その他、国内外の大学院に進学した学生もおり、希望に胸を膨らませ、すでに実社会で活躍していることでしょう。その1期生に引張られるように2期生も、2023年3月に卒業します。

その2期生とともに、本学で5年間教鞭をとった、塩谷 サルフィー マクスダグ教授がご退職になります。マクスダグ教授は本学の開学以来、国際文化交流学科の専門科目「多文化共生社会論」を私と一緒に担当してきました。先生の切り口は、インドやモンゴルの社会の現実を学生に正しく紹介し、個々の民族が互いに有している文化を尊重し合うことで、豊かな多文化社会が醸成されるというものでした。私が特に印象に残っているのは、2020年6月20日に小松市民センターで行われた公開講座「日本とインドの文化の違い」の中で、先生がお話されたことでした。私が、「個々の民族文化の伝統を尊重しすぎると、社会が分裂しませんか？むしろ、それぞれの民族が有している文化の共通する枠組みをうまくつなぎ合わせていくことで、調和のとれた社会が実現するということはありませんか？」と質問すると、「個々の民族が有している伝統文化は、他にないほど個性的かつ独自性を保持しており、それを尊重していくことこそが成熟した社会を構築できる」と、ご自身のお考えを述べて下さいました。先生の一貫した世界観が垣間見え、とても有意義な一日でした。後日、先生からご著書も頂戴し、この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。先生のご講演が終わった後、会場に来られた聴衆の皆さんが、そのまま会場に残り、先生に質問をしていたのが今でも目に焼き付いています。きっと皆さんの関心が高かったということなのでしょう。

マクスダグ先生は、学内では研究社会連携委員を担当して下さいました。先生はここ石川県で、人権問題や女性問題など多岐にわたって社会貢献活動をして来られました。公立大学の教員としてふさわしい存在であったと言えます。また、国際文化交流学科の学部共通科目「海外語学研修」において、米国のウエスタン・ワシントン大学に学生を引率する業務も引き受けてくれました。きっと先生は、引率業務において、参加学生に様々な異文化体験をしてもらいたいとお考えになったことでしょう。そして、自分の頭で考えることが大切であると。さらに、他者の意見も聞きながら、自身の考えが揺さぶられ、そしてようやく、「個の文化」を発信できるようになると。多様なものの見方、複眼的な思考ができる存在であって欲しいと願っていたと思います。

本学部の強みは、英語と中国語が必修であること、人文科学と社会科学を同時に学習できるこ

と、世界遺産検定等の資格試験の合格率が高いことなどが挙げられます。マクスダ先生もその一角を担って下さいました。世界の英語が多様化・国際化した今日、南アジアの英語を、ここ石川の地で耳にすることができるのは幸運以外の何ものでもありません。

このような評判は、南加賀をはじめ、北陸地方に広く知られるようになってきました。でもそれだけで満足をしてはいけません。2022年4月、公立小松大学に大学院が開学しました。学部が大学院と接続し、今まで以上に専門的な学びが提供されています。高度な専門的な知識と課題解決能力をもって、世界へ羽ばたいて行って欲しいと思います。さあ、今度はあなたの出番です！

最後に、紀要『国際文化』第5号の刊行にご尽力下さった皆様方に御礼を申し上げます。きっと、本誌をはじめ手に取る方もいらっしゃるかと思いますが、ぜひ、巻末にある「活動報告」をご覧ください。開学以来、毎年本誌の刊行を継続しており、これまでの学部の歩みが紹介されています。これを見れば、本学部のダイナミックな日常を知ることが出来るでしょう。また、他大学や他学部の研究者による執筆も増えてきたことは喜ばしいことだと考えます。これからも益々多くの研究者にご参画いただけるような紀要であって欲しいと祈念し、ペンを置きたいと思います。

公立小松大学
学部長 岡村 徹